

新島先生の一書簡に寄せて

青木 正太郎

去る五月二十七日名古屋市在住の校友橋本

清治氏(昭和十六年十二月 大法政学部経済学科卒業 日本ペーカライジン 株式会社 常務取締役・名古屋)が母校を訪問され、知人である東

京都東久留米市浅間町一十一一〇居住の

鈴木武男氏が明治二十年当時新島先生より同

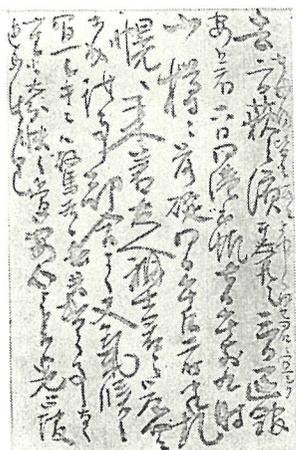
志社の生徒であった同氏の亡父にあたる鈴木

彦馬宛の書簡を所蔵されていることを漏ら

されたので、ここにその当時の事情と内容を

紹介する。(なお本書簡のコピーを六月二十

一日、本学に送付された)



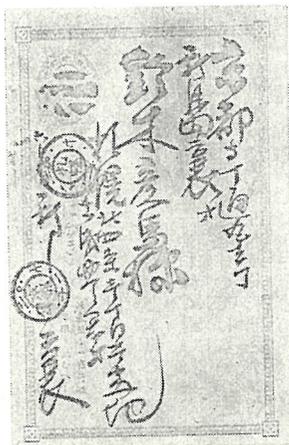
老母初皆々様ニよろしく伊セ君ニ宜シク
去二日 荻之濱ヲ発シ 三日 函館安着 六日
同港出帆 七日午前九時小樽ニ落錠同日午
后二時半札幌ニ来着友人福士君之御厄介
ニ相成諸事都合よく又氣候之宜シキニハ
驚居候私共替る事なく小生も大分快く候
間御安心被下度候先ハ御報迄如此候也

(注) 老母は新島先生の母とみ、伊セ君は伊勢時雄
(横井時雄)同志社第三代社務 福士君は福
士成豊のことである。

同志社は明治八年十一月二十九日官許同志
社英学校として開校後、新島先生および周辺
協力者の努力と各方面の理解と支援とにより
幾多の困難や障害を乗り越えて漸次活況を呈
し、明治二十年に至っては学校も予備校、神
学校、女学校等を擁する学園にまで発展し、
将来の躍進が大いに期待される状況であった
が、他方その間先生は多年にわたる心労、過

労の結果著しく健康を害され、国内では十分
な休息の時と所がなく、保養のため明治十七
年四月より十八年十一月にかけて欧米諸国の
巡遊視察を試みられたが、健康回復の徴候は
なく、帰国後も京都看病婦学校、同志社病院
の設立、生徒の徴兵猶予問題、さらには大理
想であった同志社大学設立準備のため東奔西
走される等諸問題が次々と山積し、休養の暇
もない状況であった。

明治二十年の夏、先生は避暑静養のため北
海道に滞留されたのであるが、この書簡は、
同年六月十一日八重夫人同伴にて京都を出
発、神戸より乗船して横浜着、陸路東京、白
河、福島、仙台に赴き(同志社の分校とでも
いうべき東華学校の開校式に出席される)、



新島襄の肖像写真を寄贈



寄せられた写真

この五月末、新島襄先生の貴重な肖像写真一枚が編集部宛に届けられた。

これは、山口県に在住の小笠原信氏（山口県泉町一六五）の祖父であり、また昭和のはじめ頃、同大予科の教師をしておられた、金居信雄氏が永らく保存されていた写真である。今度、寄贈されることになったのは、小笠原氏の教子である大中昌子氏（昭和四十

四年・大学文学部英文学科卒）が大学の四年生に在学中、教育実習で母校へ行かれたときに、「珍重なものなので、ぜひ同志社で保存して欲しい」と託され、このたびの寄贈となったものである。

京都・寺町の写真館で撮られた名判ほどの大きさのこの写真は退色のために少々薄くはなっているものの、当時の新島先生の貴重な一枚の写真である。

七月に入り塩釜より再び乗船、牡鹿半島の萩ノ浜を経て北航を続け、津軽海峡を通り七月三日函館着（築島にて二十三年前の元治元年六月十四日〔陽曆七月十七日〕の海外脱出當時をしのばれる）さらに六日同港出帆、七日小樽着、同日汽車にて札幌着、同地に函館脱出時多大の援助を受けた人、福士成豊（旧姓富士屋卯之吉）の出迎えをうけ、その厚意によりかねて準備のとある借家に至って旅装をといて打ちくつろぎ、かつ体調も爽快である様子等を、当時新島家の下僕書生であった鈴木彦馬（書簡所蔵者の父にあたる人―明治二十六年理化学校陶磁器兼化学専門科卒業）宛にしたためたものである。

なお、先生夫妻は引続き札幌に滞留し、その後八月に入り、京都より海外脱出時、上海より乗船のワイルド・ローバー号の船主であり、第二の父であったハーデイ氏永眠の電報を入手するや悲しみの余り先生の健康再び悪化し、心臓に苦痛を覚えられたが、その後やや快方に向ったので、先生夫妻は九月十四日札幌を辞去し、東京、横浜、神戸を経て十月一日京都に帰着された。（社史史料編集所主任）

*「ゲイン先生随感集」

におもう*

都留俊子



アリス・イー・ゲイン

同志社では、昨秋「ゲイン先生随感集」英語教師の悩みと喜び」を発行したがその後各方面から好評をいただき、すでに発行部数のほとんどを消化してしまっただ。これは、ゲイン先生のお人柄を物語るものであらう。

この度は浅沼その子さんをわづらわしてゲイン先生の御本をお願いいたしましたら大そう御親切に下さって、早速に貴重な最後の五部をお送りいただき、誠に誠にありがとうございます。なつかしい心ふるさと——母校同志社の恩をありがたく思います。卒業後四十年遠く離れて住む私共は相国寺の鐘の音や、御所御苑の小径の散歩や、チャペル、神学館、図書館等の建てたの思い出に胸がジーンとでも、いろいろな思いを思い浮べるだけなるウェット明治生れの人間達でございます。

このようなすばらしい随感集が出版されたことを、東京の人達は知りませんでしたので、二、三人に声をかけただけでたちまちに、あちこちから伝え聞いて注文を受けてしまいました。もはや時すでに遅く一回残念がっております。

ゲイン先生が「死」について書いていらつしやるところは何度拝見しても深い感激を覚えます。お送り下さった御本はくじりか何か適当な方法でわけましようかと話していますが、とりあえず順番をきめて回覧することといたします。私共のクラスだけでなく、上級生の方々のクラスにもまわすことになっております。殊に、私の一年以上級の昭和六年英文科生は予科時代の担任がゲイン先生でいらしたので特別に大量の御注文を受けてしまったのですが、平岡先生にも直接お願いして、どこかに残っていたらまわしていただくようにと、浅沼さんにお頼みしております。

ある時期にクラブ、ヒバード、ゲイン

の三先生がクラブドインと表札をかかげて共同生活をなさっていましたが、私共は仕合せにも、この三先生に教えていただきました。先日、ヒバード先生を囲んで東京で有志が集りましたが、昭和三年、二十六才の若い日に、ヒバード先生が同志社に赴任なさった時は、美しく輝く金髪も房々として、キビキビと充実した授業をしていたが、私共はわづか六、七才の年少でいたが、ずい分こわく大人の先生と見上げておりました。それが、今は、背も腰もまるく小さくなられて、お手も始終ふるえが見えて、痛々しく見受けられました。おっしゃることは大そうお元気で、宣教師の定年退職の問題等についてはこぶしをふりかざしてパイオニア精神を語っておられますが、今年の九月で六十八才になられるとか承りますと、日本人の私達は、殊に、家庭にはいったものは、子達に囲まれ、孫共に慰められて、家族にいたわれ守られる年頃です。感無量でございました。ヒバード先生の御両親も宣教師として献身の生涯でしたが、御老後の老人ホームでは共通の話題、思い出につなげる日本の親しかった人々と離れてお淋しかったと承りました。

ゲイン、ミス・ヒバードそれぞれにすぐれた先生方めぐり会えた私共はこの幸福を光栄をどのように還元して御恩に報いるべきかと先日の集会でも話しあったのでございました。

嬉しさの余り、ついダラダラと長くなりまししたが、御礼の言葉がうまく出ないもど平安を祈りあげます。